支　笏　湖　事　業　場

毎年，夏の風物誌として道内は勿論全国的に有名な支笏湖の「チップ」釣りは支笏・洞爺国立公園の観光資源とともに益ます重要性を高めている。

支笏とはもともとアイヌ語で，シ（大きい）・コツ（跡）で大きな窪地を意味する。これがシ・コツ・トー（湖）で，この下流域一帯をシコツと呼んでいたが，これは「死骨」に通じて縁起が悪いということで現在の千歳に改められた。

この湖は火山による陥没湖で円形をなしていたが，その後，樽前山，不風死岳，恵庭岳の噴火によって現在のようにひょうたん形の湖になった。湖の周囲は約41km，水深最大363mで湖底は海面下120mにあり，洞爺湖，噴火湾の底とほぼ同一標高になっていると言われている。湖の流入河川は美笛川，オコタン川などの数河川にすぎないが，排水河川は千歳川に通じ，流出水量毎秒約12m³を利用して王子製紙(株)の発電所が経営されている。

同湖の在来からの水産動物としてはアメマス，カジカ，サンショウウオが生息しているにすぎなかったが，明治21年から始められていたサケ・マスの人工ふ化事業の回帰性を実証することを主な目的として，阿寒湖産のカパルチェプ（ヒメマス）を明治27年から3か年に亘って698千粒を移殖し，生産された稚魚550千尾を湖水に放流した結果，ヒメマス資源は年毎に増え続けた。原産地である阿寒湖よりも大きな種苗供給湖となり，道内は勿論，全国的に大きな貢献をはたしてきた。

一方，湖内ヒメマスの人工増殖事業は，明治27年，稚魚放流とともに始められ，親魚の捕獲採卵事業は明治31年から開始されている。しかし，ふ化事業の経営についてはふ化場職員は常駐せずに，季節的に出張して実施し，別に留守番のために人夫を雇傭して常駐させた。(明治31～33年松田岩吉，明治33～昭和4年成田三作，昭和4～20年中塚留太郎)

戦後の昭和23年から職員が常駐して勤務するようになり，現在までの事業場主任（現在事業場長）は，大東信一，佐々木正三，菊地資郎，奥野敦，現在安田貞男の各氏であるが，当初は道職員も含めて3名であったが，漸減されて現在は1名のみの勤務となっている。

このふ化場の業務は，6月から8月までのヒメマス釣獲の解禁，10～11月親魚捕獲採卵，周年に亘る湖水環境と資源量調査など複雑雑多な用務が多い。

さきに紹介した風物誌としてのチップ釣りも，明かるいうちにおとづれる観光客の目には誠になごやかな風景と受取られるが，未明または薄暮の釣り状態は一変する。それは，生活をかけたプロ級釣師の暗躍である。北海道内水面漁業調整規則をどのように改訂してみたところで，釣装備の改善進歩，不法漁獲，撤底した密漁取締りが出来ないなど，多くの問題点を抱えている。

昭和38年，共同漁業権を免許する方針で関係機関の間に検討が進められ，成果を得られないうちにご破算となり，以来こんにちまで，解禁期間中に調査魚を採捕する業務を千歳市に委託させ（5～7万尾)、この期間中の密漁取締は，北海道水産部，千歳警察署の担当・指導のもとに，千歳市が実施している。この千歳市が受託して実施する特採は，禁漁区域内で建網，刺し網を使用して行なわれるために，一般の人びとが誤解して新聞紙上をにぎわせている。これは，行政庁である北海道，観光資源として受持つ千歳，人工ふ化放流を担当するさけ・ますふ化場さらに現地のヒメマス保獲協力会など，それぞれの立場があって，スッキリとした姿を確立しようと努力をし，検討を行なっているがなかなかむずかしい問題ではあるが，早く解決してほしいものである。　　（千歳支場　次長）